

銭形平次捕物控

二枚の小判

野村胡堂

青空文庫

「親分の前だが——」

ガラツ八の八五郎は、何やらニヤニヤとしております。

「前だか後ろだか知らないが、人の顔を見て、思い出し笑いをするのは罪が深いぜ。何を
いったい思い詰めたんだ」

銭形の平次は相変らずこんな調子でした。年を取っても貧乏しても気の若さと洒落しやれつ気け
には何の変りもありません。

「ね、親分の前だが、褒美ほうびを貰つかつたら何に費つかおうか、あつしはそれを考えているんで」

「褒美？」

「忘れちゃいけませんよ。近ごろ御府内にチヨイチヨイ贖にせがね金ねが現れるんで、その犯人を
挙げた者には、たいそうな御褒美を下さるといふ御触れじやありませんか」

「なんだその事か、——そいつは取らぬ狸たぬきの皮算用かわざんようだ。当てにしない方が無事だろうぜ」
「でも、万一ということがあつしがあるでしょう。あつしがその贖金造りを捕えたら、どうなるで

しよう、親分」

「たいそうな氣組みだが、——まア諦める方が無事だろうよ。半年越し江戸中の岡っ引が、鵜の目鷹の目で探しても、尻尾をつかませない相手だ」

「でも——」

「万一なんてことがあるものか、谷中の富籤じゃあるまいし」

「谷中の富籤ほども分がありませんかね、親分」

「まア、そんな事だろうよ」

錢形の平次が諦めているほど、その贋金遣いは巧妙を極めました。

そのころ横行した贋金というのは、いわゆる銅脈といった種類で、銅の台に巧みな鍍金をほどこした細工物で、素人目には真物の小判と鑑別がなかなかつばかりでなく、贋造貨幣犯人の一番むずかしい使用法が巧妙で、江戸中の恐怖になりながらも、容易にその根源を探らせなかつたのです。

「あの——」

そんな夢のような事を話しているガラツ八の後ろへ、平次の女房のお静はそつと顔を出しました。相変らず若くて内気で可愛らしい女房ぶりです。

「なんだ」

「お客様ですが——」

「お客様？ どなただ」

「それがわかりません。真^まつ蒼^{さお}になって顫^{ふる}えているようですが」

「お勝手か」

「え」

平次は黙つて立ち上がると、女房を掻きのけるように、お勝手へ顔を出しました。そこには誰もいません。

二月の町は宵ながら冴え返つて、戸をあけたままのお勝手の土間に、冷たい月の光がパイに射している中には、お静の言う真つ蒼になって顫えているお客はおろか、顔馴染の野良犬も来てはいなかつたのです。

「八」

「八エ」

たったそれだけの号令で、八五郎は疾^{しつぷう}風のように駆け出しました。匱^{みつけ}金造りを縛つた褒^ほ美^みで、三浦屋の高尾の身請^{みつけ}でもするような氣でいる空想家のガラツ八ですが、一面には

また錢形平次の助手として、辛^{しんらつ}辣きわまる實際的な鬪士でもあったのです。

間もなく路地一パイの騒ぎを展開しながら、八五郎は一人の若い男を引摺^{ひきず}るようにして戻つて来ました。

「この野郎、逃げようたつて逃がすものか。さア、真つ直ぐに歩け」

「行きますよ、親分、——逃げも隠れもしません。どうせ錢形の親分にお問い合わせするつもりで来たんですもの」

「何を言やがる、——そんなら逃げるわけはないじゃないか」

八五郎に小突かれながら来るのは、二十三四のめくら縞^{しま}の半纏^{はんでん}を着た、小柄で、色の黒い、小商人^{こあきんど}風の男でした。

「八、何という騒ぎだ。御近所の衆がびつくりするじやないか」

平次は見兼ねて戸口から声を掛けます。一国者の八五郎は、お勝手を覗^{のぞ}いて逃げ出したという男を、縛り上げ兼ねない見幕だったのです。

「いつたいたいどうしたというんだ。——お前さんはお勝手を覗いて、俺に逢いたいと言つたんだらう」

「へエ」

「それが急に逃げ出すからこんな騒ぎになるじゃないか」

若い男を家の中に入れると、銭形の平次は打ち解けた調子でこう問い進むのです。

「相済みません。——私は怖くなりましたんで、へエ——」

若い男はようやく口を開きました。

「何が怖かつたんだ。俺はそんな怖い顔をした覚えはないが——」

平次はツイ破顔はがん一笑します。まだ三十を越したばかり、にっこりするととんだ愛あい嬌きょうのある平次の顔が、脅おびえ切つた相手の男の心持を和やわらげたようでもあります。

「——なまじつか、私が言いさえしなければ、誰も知るはずのないことを面喰らつて余計なことを言つて、巻き添えになるのが恐ろしゅうございます」

「何の巻き添えなんだ。——正直に話したらお前さんの迷惑になるようにはしない。詳くわしく話してみるがいい」

「染吉が殺されていたんで、へエ——、驚いたの驚かないのって——」

突然そんな事を言つて、若い男はそつと後ろを見廻します。

「染吉が殺された？」

このあわてた男の口から、事件の実相をつかみ出すのは、銭形の平次にしても、容易ならぬ仕事でした。

この男は勇太郎という湯島のささやかな炭屋の亭主で、幼友達の染吉というのと、今日の夕刻妻恋つまこいいなり稲荷様の前でハタと逢い、しばらくその前の空つぼの茶店の縁台で話して別れたが、家へ帰つてフト商売用の秤はかりを忘れて来たことを思い出し、稲荷様の茶店まで引返してみると、染吉は縁台に腰を下ろしたまま、頭を打ち割られて、血だらけになつて死んでいたというのです。

「——驚いて銭形の親分さんのところまで飛んで来ました。銭形の親分さんなら、染吉を殺した本当の下手人げしゆにんをわけもなく見付けて下さるだろうと思つたからでございませう。お勝手口から覗いて、お神かみさんに取次は頼みましたが、——考えてみると、私と染吉が妻恋稲荷様の縁台でしばらく話していたのを、お月様の外には誰も見たわけではなく、このまま黙つていさえすれば、私は何の關係もない人間で涼しい顔をしていられます。面喰らつて余計なことを申上げ、巻き添えを喰うのは馬鹿馬鹿しいことだと思つて、急に逃げ出す

気になりました」

若い男——炭屋の勇太郎は、ガタガタ顫えながらようやくこれだけの事を話したのです。
「それつきりか」

ガラツ八は後ろから少し荒っぽい声を掛けました。

「それつきりでございませう。もつとも、私の秤は死骸の傍そばにも見えませんでした。あわてどこかへ振り落したのでございませう」

「染吉と、どんな話をしたんだ。——そいつを聴こう。——いや、どうせ現場へ行くんだから歩きながらの方がいい」

平次は手早く仕度をして飛出すと、大根畑への道を急ぎながら、勇太郎の答えを促うながしました。

「いろいろ意見を申しました」

「意見というと？」

「染吉と私は湯島に生れて湯島に育つて、本当の幼友達でございませう。私はこの通り分別も工夫もない人間で、親譲りの小さい炭屋を、後生大事に守っておりますが、染吉は働働き者で派手好きで、親譲りの縫ぬい箔屋はくやを嫌い、いろいろ儲もうかりそうな仕事に手を出して、派

手な暮しをしておりましたが、そのために内輪が苦しくなるばかりで、近頃はひどい借金に悩んでおりました。久し振りで逢った幼馴染の私は、自分の廻らない智恵も忘れて、ツイ意見がましい事も申ししたわけでございます」

「フム」

「すると染吉は、近頃いろいろ考えた末、危ない商売とフツツリ縁を切って、本当に堅気かたぎになるつもりだから安心してくれと申します。私は——儲けるより溜める方が早い——というと染吉は『俺も今になつてつくづく悟つた。——いずれ錢形の親分のところへでも行って、詳しく申上げ、悪い事から足を洗いたいが、お前は錢形の親分を知っているなら一緒に連れて行つてくれ——』とこう申しておりました」

「それから」

「一度は薄情な仕打ちもした許いいなずけ嫁よしのお芳にも、今晚は逢つて心から詫わびをするつもりだ。長いあいだ悪い夢を見たが、お芳はこの染吉を勘弁してくれるかしら?——と染吉はそんな事を言っておりました」

「お芳というのは?」

「妻恋坂の荒物屋の娘で、染吉の許嫁でございました」

そう言う勇太郎の調子には、言うに言われぬ深い感情のあるのを、平次は見逃さなかつたのです。

「お前とは関係はないのか」

「とんでもない、親分さん、私などが——」

パツと赤くなる勇太郎の初心^{うぶ}さは、この三人の関係の並々でなかつたことを白状しているようでもあります。

三

妻恋稻荷の前の茶店——昼は婆^{いまだやき}さんが一人今戸^{いまだやき}焼の狸のように番人をしておりますが、日が暮れると自分の家へ引揚げて、莫^{ごぎ}塵^{ごぎ}や毛^{もう}氈^{せん}を剥^はいだままの縁台が、淋しく取残されているところに、染吉の死骸が月の光に照らされて、浅ましく横たわっているのです。

往来から少し離れているので、幸い野次馬の眼にも触れなかつたらしく、平次とガラツ八が、勇太郎を追つ立てるように行つた時は、何もかも勇太郎が発見した時のままになつておりました。

「こいつはひどい」

八五郎が思わず尻ごみしたのも無理はありません。染吉の死骸は縁台の下に滑り落ちておりませんが、後ろから重い物で、頭を一と思いに叩かれたらしく、よく剃そった月代さかやきから鬢びんにかけて、血潮に染んでこと切れているのです。

「物も言わずに死んだことだろうか」

平次はそう言いながら死骸を引起して、いろいろ調べております。

「何で打つたんでしょう」

ガラツ八はその辺を捜しましたが、兇器になるような石も棒も見当らず、かえって染吉の持物だったらしい、贅ぜいたく沢たくな羅紗ラシヤの紙入が見付かりました。

「中に何かあるか見た上で、お前が預かっておいてくれ」

平次は声をかけました。

「何にもありませんよ」

「抜かれたんだろう」

「これが目当ての泥棒ですかね」

「いや、そんなことじゃあるまいよ。泥棒ならこんな結構な煙草入を盗とらずに行くはずは

ない」

平次は染吉の死骸から抜いたきんからかわ金唐革の恐ろしく金のかかったらしい煙草入を月の光にすかしました。

「大変な品ですね」

「フーム、こんな物を持つのは、江戸でも名のある町人かだいっつう大通、でなければよっぽど思
いあがつた人間だ。——おや、煙草入の中に小判が二枚入っているよ」

平次は小判を月光にすかして、ヒヨイと重さを引いて見ましたが、元の煙草入に納めて、自分の懐ろに入れました。その頃からただならぬ物の気はいに驚いて、近所の衆や往来の野次馬が、次第に集まり、町役人なども駆けつけて来ます。

「それにしても贅沢な人間ですね」

ガラツ八は月の光や、次第に集まってくるちようちん提灯の光の中で、死骸を眺めながら、こんな遠慮のない事を言うのでした。

見る影もない死にようですが、染吉というのはよっぽどの洒落男しやれだったらしく、妙に金のかかった身の廻りや、身だしなみの良い小意気な男つ振りなどを見ると、女で問題を起し兼ねない様子です。

一と通り検屍けんしが済んだのはもう亥刻よつ（午後十時）近いころ、平次は紙入と煙草入だけを、二三日借りることにして、現場を引揚げました。

「八、ちよつと付き合つてみないか」

「一杯やらかすんでしよう、ヘツ、ヘツ」

「馬鹿だなア、付き合えつて言えば、飲むことだと思つてやがる。染吉殺しはまだ目鼻もつかないじゃないか。明日の天道様てんとうの出る前に、もう少し当つておきたいところがあるんだ」

「ヘツ、付き合いますよ。——酒は御免を蒙こうむるが、憚はばかりながら御用と来た日にや、夜が明けたつて日が暮れたつて驚きやしません」

「急にいきり出すじゃないか、——飲み損そこねて口惜くやしかろうが、そんなに十手なんか突つ張らかさなくたつていいよ」

そう言いながら、平次が叩いたのは、妻恋坂の荒物屋の戸でした。

そこには六十を越した父親の周しゅうきちち吉と、十九になつたばかりの娘のお芳と二人つきり、夜更けに顔見知りの御用聞——錢形平次に飛込まれて、さすがに胆きもをつぶした様子です。

「これは親分様方」

周吉はあわてて引っかけたらしい半纏はんでんの前を合せながら、すっかりオドオドしております。後ろから行灯あんどんを持つて来たのは、まださすがに昼のままの、身だしなみを崩さないお芳。十九というにしては少しふけて、賢そうな浅黒い顔、キリリとした眼鼻立ちは決して美しくはありませんが、何かしら一度見た者の記憶に焼きつく特徴を持つております。「染吉が殺されたんだが、知っているだろうな」

平次は短兵急でした。

「あの騒ぎですもの、よく知っておりますよ。でも、年寄りと若い女の見るとは異なるものじやありませんから、お芳も外へは出しません」

周吉の調子には、年寄りらしい用心深さがあります。

「染吉は今晩お芳と逢う約束だったそうだな」

「そんな事が親分——」

あわてて弁解する父親の袖をそつと引いて、

「父さん、みんな申上げた方がいいでしょう、——染吉さんは久し振りで逢つて話したいことがあるから、父さんには内証ないしよで、私に酉刻半むつ（七時）頃お稲荷様まで来るようにと、酒屋の小僧さんに頼んで伝言こつづてをよこしました」

お芳の顔はさすがに緊張して蒼くなります。

「行つたのか」

「ハイ、父さんの御機嫌がむずかしくて、家を出られないんで、少し遅れて行つてみると」
「……………」

「親分さん方が、染吉さんの死骸を調べているところでした」

「その前は確かに出なかつたのか」

「出やしません。出しもしなかつたので、へエ」

周吉は頑固がんこらしく口を入れます。

「染吉とお芳さんが、許嫁だつたという噂うわさがあるが、本当かい」

「とんでもない、親分。あんな道楽者のところへ、大事の娘をやるわけはありません。もつとも昔はあんな男じゃありませんでした。この私も娘をやる気になつたこともあります
が——」

「どうだいお芳さん」

平次は周吉に構わず、お芳に問い進みました。

「一年前、そんな話もありました。でも、近頃の染吉さんは——」

お芳の顔には、悩ましさが雲のごとく湧きます。

「勇太郎は染吉と張り合つたんじゃないのか」

「あの人は正直で気の良い人です。一時染吉さんと面白くない事があつても、それを根にもつような人じゃございません」

お芳はむしろ勇太郎に好意を持つているらしく、躍起となつて弁解します。

四

「親分、何にもわかりませんよ。この上は勇太郎を縛つて、二三束叩いてみるんですね。」

江戸一番の正直者みたいな顔をしているだけにあの男には臭いところがありますよ」

いろいろの情報を集めさせにやつた八五郎は、翌^{あく}日の昼過ぎにフラリと帰つて来ました。

「そんなわけには行かないよ。本当に勇太郎が下手人^{げしゆにん}なら、あんなにあわてるはずはない。それにあれだけの傷を拵^{こぎ}えただから、下手人はうんと血を浴びるはずだ。勇太郎にはそんなものはなかつたぜ」

平次は落着き払っております。

「家へ帰って着換えて来る術すべもありますよ」

「そんな落着いたことの出来る男じゃない」

「でも、勇太郎の秤ばかりは見付かりましたよ、分銅ぶんどうにはうんと血が付いて——」

「どこで見付かったんだ」

「町内の若い者が妻恋稻荷の後ろの藪やぶで見付けたんで」

「秤と分銅と一緒にあったのか」

「秤の先へ分銅を縛ってあったそうです」

「フーム」

「これだけでも、三輪みのわの親分なんかの耳に入ると、勇太郎を縛りますよ」

「家へ帰って着物を換えるほどの落着きがあるなら、分銅くらいは洗っておけそうなものじゃないか。現場のすぐ近くへ、血の付いたまま捨てて行くのは、下手人はこの秤の持主ではないと言っているようなものだ。勇太郎はそれほどの馬鹿じゃあるまい」

「そうですかね」

平次の論理の前に、ガラツ八は小首ひねを捻るばかりです。

「お芳はどうした」

「世間では何とか言うが、あの娘は人を殺すような人間じゃありませんよ。染吉はお芳の生真面目なのが嫌になつて、この一年ばかり前から、丸山町の直助のところへ入りびたつて、その妹のお辰というのに夢中になっているが」

「丸山町の直助——聞いた事のない名だな」

「出来星できぼしの金持ですよ。米相場で儲けたとか言つて、大変な景気で、その妹のお辰はまた、小格子から引っこ抜いて来て、装束しょうぞくを直したような恐ろしい女ですよ」

「いずれそいつは後で当ってみよう。ところで、俺の方は大変なものを見付けたよ」

「何です、親分」

「これだ」

平次はゆうべ染吉の死骸から持つて来た、金唐革きんからかわの煙草入を出して、中から二枚の小判をつまみ上げます。

「小判がどうかしたんで」

「こいつは銅物どうものだよ」

「えッ」

「近ごろ江戸中を騒がせている銅脈さ。一寸見は真物の小判と少しも違わない。——もつともこちとらは、滅多に小判を見ることもないが、——両替屋へ持って行って、丁寧に見て貰うと、こいつは良く出来ているが全くの贋物だ」

「へエ——」

「殺された染吉が、悪事から身を退いて、俺のところへ来ると言っていたそうだな」

「勇太郎はそんな事を言いましたね」

「その途中で殺されたのかも知れない。——ありそうな事だ。殺した奴は染吉の財布ばかり覗いた。その中の物をみんな奪ったのは、小粒や、青銭まで欲しかったわけじゃあるまい。下手人は、染吉の持っているこの贋物の小判を奪るつもりだったかも知れない」

「……………」

飛躍する平次の天才、その推理の塔の積み重なるのを、八五郎は呆気にとられて聴き入るばかりです。

「ところが、染吉は用心して、大事の小判を煙草入の中へ入れた。——羅紗の結構な紙入を持つている人間が、腰にブラ下げる煙草入などに小判を入れるはずはない。その煙草入は三両や五両で買えるような品じゃないんだから、不用心ばかりでなく煙草入もいたむ」

「……………」

「八、こいつは面白くなつたぞ」

「何が面白いんで？ 親分」

八五郎は四方あたりをキョロキョロ見廻します。二月の陽は縁側にカツと射して、貧しい平次の住居を隈くまなく照らし出しますが、別に八五郎の眼には、面白くなるようなものもありません。

「染吉は贋にせがね金造りか、贋金遣いを知っていたのかも知れない。——縫箔屋ぬいはくやを止よしてノラクラ者になつた染吉が、こんな贅沢な暮しをしているところを見ると、どうかしたら、染吉もその贋金遣いに関係を持っていたのかも知れないよ」

「……………」

「近ごろ何かのわけがあつて、贋金遣いの仲間が恐ろしくなり、自首して出て、自分の罪だけでも許して貰おうとしている矢先、仲間の者に嗅かぎ付けられて、一と思いに殺されたんじやあるまいか。——俺にはどうもそんな匂いがしてならない」

「……………」

「染吉を殺した下手人は、よつほど染吉と昵懇じっこんな奴だ。——染吉の後をつけて来て、妻

恋稻荷で勇太郎と話すのを盗み聞きしたんだろう。染吉が自首するに違いないと見て取つて、勇太郎の姿が見えなくなるとすぐ染吉のところへ姿を現し、馴れ馴れしく話しかけながら、勇太郎の忘れて行つた秤ばかりで力任せに殴つたんだろう。秤に分銅を縛つてあつたというから、こいつは恐ろしい得物だ、手もなく宝ほうぎん山流さんりゅうの振り杖ぶづえさ」

「……………」

「そこへ勇太郎が帰つて来たので、秤やぶを敷やぶに放り込んで、下手人は逃げ出した。恐ろしい奴だ」

「誰でしょう。その下手人は？」

「解らない。まるつきり解らない。とにかく染吉の繁しげしげ々しげ出入りする家を探すことだ」

「差当り丸山町の直助はどうです」

「行つてみよう。無駄かも知れないが」

平次とガラツ八は、そこから真つ直ぐに、丸山町に飛んだことは言うまでもありません。

五

丸山町の直助の家は、崖がけの上に建った立派な家で、構えも木口も相当、後ろに竹林があって、前に五六軒の長屋を並べ、その家賃だけでも呑のん気に暮せそうな様子です。

不意に訪ねると、幸い主人の直助も、妹のお辰も顔を揃えておりました。直助は三十を越した、愛嬌のある好い男、少しばかり上方かみがたなまり訛のあるのも、上手な商売人らしい印象を与えます。

「銭形の親分さんでしたか、それはどうもお見それ申しました。私は御当地へ参つてまだ三年と経ちませんので、土地の方にも馴染が薄うございます。——染吉さんが殺されたそうで、へエ、へエ、人から聞かされてびっくりいたしました。私も湯島のお宅へ顔だけ出して参りましたが気の毒なことでございます。気持の好い方でしたが、——近頃はよくここへも見えました。現に昨日もおいでで、昼過ぎまで話して帰りましたが——」

そういつた滑なめらかな調子。

染吉との関係は商売のことから懇意になり親しく往来しているうちに、妹のお辰を嫁に欲しいという話になり、本人も大方承知していたが、具体的な話を進める前にあんな事になって、お辰も力を落している——というのです。

話の中に、妹のお辰も出て来ました。二十一二の年増盛りで、お芳の野暮やぼったい様子に

比べると、お月様と鼈すつぼんほどの違い。身の廻りの贅ぜいはとにかく、厚化粧で、媚沢山こびだくさんで、話をしていても愛嬌がこぼれそう。

「まあ、本当に、染吉さんは、お可哀想に。私はもう、死んでしまいたいと思いました」
そんな事を言いながら、涙を拭いたり、兄の直助の身の廻りの世話をしたり、所作しよさ沢山ざくさんにしているのです。

「ゆうべは外へ出なかつたらうな」

平次は委細構わず調べをつづけました。

「妹と二人、一杯飲んで、好きな小唄の稽古をして、早寝をしてしまいました。——もつとも、私の出入りは必ず前のお長屋の中を通りますから、その辺で訊きいて下さればよく解ります。外に道はございません」

そう言われるとそれっきりの事です。

それにしても調度の見事さ、暮しの豊かさ、ここの生暖かい空気に包まれていると、平次も八五郎も何かうっとりした心持になります。

「江戸には滅多めったに見られない家だが、ちよいと家の中を見せて貰えまいか」

「へエ、どうぞ、親分方が御覧になるような家ではございませんが」

直助は気軽に立つて、平次と八五郎に家の中を見せてくれました。中は贅を尽してありますが、至って簡単で明るくて、にせがね鷹金等を造る場所があるうとも思えず、そんなものを貯えておく様子もありません。

「二階は？」

「富士山の見えるのが自慢でございしますが、あの通りもうそうだけ孟宗竹が伸びて、せっかくの眺めを台なしにしまいました。いずれ竹を切ってしまうつもりですが——」

指差すと、小石川一帯の町を眼下に眺めて、その上に富士も見える景色ですが、崖の竹林がひどく繁つて、すっかりその眺望を隠しております。

そこを出た平次とガラツ八は、前の長屋で一通り直助きょうだい兄妹のことを訊いて、それから湯島を廻つて、殺された染吉の家へ立寄り、線香を上げて様子を見ました。集まったのは近所の衆と、昔染吉の先代が使った縫箔の職人だけ。耳の遠い婆さんと染吉とたった二人の世帯は、主人が死ぬと火の消えた淋しきです。

近所でいろいろ噂を集めました、贅沢で人を人臭いとも思わない染吉には、相当に反感があり、突っ込んだことは誰も知りません。

「親分、下手人は誰でしょう」

ガラツ八はどうとう考え草臥くたびれました。

「まだ解らないよ」

「勇太郎じゃなしお芳でないとする、やはり直助じゃありませんか」

「どうして、そんな見当をつけたんだ。——直助は昨夜外へ出なかつたんだせ」

「でも、あの男は油断がなりませんよ」

「前の長屋で、直助兄妹は昨日の昼過ぎから外へ出ないと言ってるじゃないか。それも五人や三人の口が揃つたのじゃない、——三味線と小唄も聴えていたというし」

「でも、変じやありませんか、親分」

「何が変なんだ」

「何となく変ですよ」

八五郎はキナ臭いものを嗅ぎ出すように鼻の穴を大きくしました。

「それはこうさ、あの直助とお辰は、兄妹じゃないんだ。俺には初めからよく判つた」

「へエ——」

平次の言葉は予想外です。

「お前の眼にも変に映つたらしいが、兄妹でないと見破ることは出来なかつた。ただ、兄

という直助と、その妹というお辰の取廻しが変に見えたんだ。——川柳にはうまいのがあ
るよ。『それでなくてあの所作振りがなるものか——』ってね。妹があんなに兄の世話が
焼けるものか。吸い付け煙草などは兄妹の仲ですることじゃないよ」

「すると」

「二人は夫婦さ」

「染吉がお辰に夢中になつたのは？」

「直助が承知で釣つたんだろう。——とにかく、あの男の稼業をもっとよく知りたい。気
の毒だが下つ引を四五人駆り出して、直助の身許と身しんしょう上じやうと商売のことを、もっとよく
調べ抜いてくれ」

「へエ」

ガラツ八は拳こぶしを放たれた鷹のように、どこともなく飛んでしまいました。

六

それから三日目。

「大変ツ、親分」

「サア、来やがった。どこで大変を拾って来たんだ」

あわてて飛込んでくる八五郎を迎えて、平次は何やら期待にニヤリニヤリしております。

「三輪の親分が乗り込んで来て、丸山町の直助の家を根気よく家捜ししましたぜ」

「何か出たかい」

「何にも出ないから不思議で、——出たのは真物ほんものの小判が三両ばかり」

「それから」

「三輪の親分もすごすごと引揚げましたよ。床下も天井も剥はがし、井戸を覗いて庭まで掘つたが、口惜くやしそうでしたよ、三輪の親分の顔が」

「それつきりか」

「それつきりです。でも三輪の親分が目をつけるようじゃ油断がなりませんね」

「お前の調べはどうだ」

「直助は米相場のコの字も知りませんよ。上方で儲けたような事を言っているが、三年前江戸へ来た時は裸一貫で、それから何をするでもなく金が出来て、妹というのを呼寄せあの豪勢な暮しが始まったそうです」

「フーム」

「あのお辰というのは恐ろしい腕で、今まであの女に釣られて出入りした男が幾人あつたかわからないが、それが順々に来なくなつて、近頃は染吉ともう一人、中年者の男がちよいちよい来るそうですよ」

「そんな事だろうよ」

「早くあの野郎を縛つて下さいよ、親分。三輪の親分に先手を打たれちや業腹ごうはらじゃありませんか」

ガラツ八は一生懸命に説き立てました。

「証拠は一つもない。贖にせがね金かねが一つでもあの家になれば縛れるが、——でなきや、あの晩、直助が外へ出たと判れば——」

「行つてみましょう、親分。ここで考えたつて何にもなりませんよ」

「そうしようか」

平次はどうとう出かけました。甚はなはだ自信じゆんのない姿です。

丸山町へ行つて崖の下の方から見ると、直助の家は竹林の上に屋根だけ見えますが、竹林の中には人間の歩いた様子はなく、第一、竹林の外の枳からたち殻がき垣がきは、見事に繁つて猫の子

ももぐれそうにはありません。枳殻垣の外には椎しいの樹きが二三本、それは近所の洗濯物の干場に利用されてあります。表へ廻ると、直助とお辰はけろりとして迎えました。

「たびたび御苦勞様で——、二階から今日はよく富士が見えます。邪魔な竹の芯しんを止めて、よく眺めのきくようにしました。どうぞ」

直助兄妹が先に立つて二階へ案内します。なるほど障子を開けると、庇ひさしに冠かぶさるようになり、繁さかった竹を十本ばかり、梢こすえの方二三間切つてしまつて、下枝は青々と残したまま、その上から小石川の高台も富士も見えるようにしてあります。

「この通り良い眺めになりました」

直助は縁側から彼方あちこち此方こちを指します。

「このあいだ三輪の親分が来たそうだな」

「ヘエ——、家捜しには驚きました。何にもあるわけはございませんが」

直助は酸すっぱい顔をするのです。

その間にお辰は茶を入れて、厚切りの羊羹ようかんとこぼれるばかりの愛嬌あいせうとを一緒に持つて来ました。

「親分さん、どうぞ」

品しなをつくつて七三に平次とガラツ八を眺めると、背筋をゾクツと不気味なものが走りま
す。

「八、昨夜の風はひどかったなア」

平次はいきなり不思議なことを言い出しました。

「へエ——」

「主人にお願いしてあの先を切った竹を二三本頂戴したい。風でひどく痛められたようだから、お前は近所の植木屋へ行つて、親方を引つ張つて来てくれ」

「へエ——」

何が何やら、わけも解らずに立ち上がる八五郎、それを追つて、梯子はしごだん段のところ

平次は何やら囁ささやきました。

ややしばらく、直助と平次の、気まずい対立はつづきます。一度下へ行つたお辰は、この時そつと登つて来て、直助の後ろに寄り添います。

下の方へは八五郎の手が廻つて、間もなく町内の植木屋が来た様子。

「どの竹を切るんですか」

そんな大きな声が聞えます。

「芯を止めた竹を切るんだ」

上から平次。

「いや、切っちゃやらねエ、主人の俺が不承知だ」

いつの間にやら脇差を左手に持った直助は平次の横手から狙い寄っているではありませんか。振り返ると梯子段の上には、雌猫めねこのようなお辰が、これもヒ首あいくちを逆手さかてに不気味な薄笑いを浮べて立っております。

「気が付いたか、直助」

平次は平然として、十手も出しません。

「野郎ッ」

サツと切りかける直助、引外して、平次の手から、二三枚の投げ銭が飛びます。

「あッ」

と、たじろぐ直助。それを見ると、後ろからお辰は雌豹のように飛付きます。

争いは一瞬にして決しました。平次がお辰を膝の下に敷いたとき、直助は二階の縁側から竹に飛付いて、真に猿のように、竹から竹を伝わって枳殻垣を越え、椎の樹を滑り降りて、下の往来に立ったのは、思いも寄らぬ見事な体術です。

しかし、直助にも違算がありました。往来へ飛降りると同時に、身体の備えもきまらぬところへ、

「御用ツ」

どこに隠れていたか八五郎のガラツ八、一世一代の糞くそぢから力を出して、むんずと組み付いたのです。

*

植木屋の鋸のこに従って切倒される竹からは、鷹造がんぞうの小判がゾロゾロと出て来ました。平次に睨にらまれ、三輪の万七に脅かされた直助は、手元に証拠せいきょの偽小判をおく危険を覚さとりましたが、その時はもう持出す機会を失してしまったので、二階からの眺望のためと言い触ふらして、太い孟宗もうそうを十本あまりも途中から切り、上から鉄の棒で節を抜いて、大地に生えたままの生竹に、実に八千両という贗造小判を隠したのです。三輪の万七はそれを見付け兼ねましたが、竹の切りようの異常なものと、昨夜の風で、梢のない葉の少ない竹が反って吹き歪ゆがめられているのを見て、平次は咄嗟とつさに偽小判の隠し場所を発見したのです。

直助兄妹が極刑きよつけいに処せられ、その相棒で、小判を贖造していた飾り屋の安というの
も捕われて後、

「今度はお前にもよく判るだろう、絵解きにも及ぶまい」

と言うと、八五郎は、

「贖金の方はそれでわかるとして、直助が染吉殺しの下手人と解ったのは？」

と訊きました。

「お辰が直助の妹でないと判った時から怪しいと思つたよ。それから、長屋の衆は三味線
と小唄は聴いたが、それが直助やら、お辰やはつきりした事は判らなかつた。——もう
一つ、直助の腕と身体を見て、この男なら、竹から竹に伝わって枳殻垣が越せると思つた
んだ。——染吉を殺したのは、極くごく懇意な男だ、勇太郎か直助の外にはない」

「……………」

「お辰をおとりに染吉をだま騙して贖金遣いの手先にしたが、だんだんうるさくなつて、変な様子
を見せたので、染吉は寝返る気になつたんだろう。——夫婦者がいつまでも兄妹の真似は
出来るものじゃない、今までもその手でさんざん使われた上二三人は殺されたらしい」

「お芳は？」

「あの娘は勇太郎と一緒になるだろうよ、似合いの夫婦じゃないか。——儲けるより溜める方が早い——と言ったね、良いことを聴いたよ、俺も少し溜める気にでもなろうか。ハハ、ハツハツハツ、もつとも贋金遣いを縛った褒美の金は、八五郎が貰うことになってるよ。今度はバラ撒かずに溜めておくがいいぜ」

平次は女房のお静を顧みてわだかま蟠りもなく笑いました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十五）茶碗割り」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物全集第十七卷 権八の罪」同光社磯部書房

1953（昭和28）年10月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1943（昭和18）年2月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

二枚の小判

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>